

持続可能社会への取り組み

点検の不動産利活用

一般財団法人 日本不動産研究所

第8回

数々の北斎作品

＊の距離を宿場町に立ち寄りながら約5泊6日で来訪したというのだから、高齢にして驚くほどの健脚である。

長野県では「SDGs未来都市」計画(概要)が発表されており、30年の目指す姿として「学びの県」「人を惹きつける快適な県」等が標榜されている。小布施町は、人口1万1008人(20年5月1日現在)、面積19・12^{km}と県内最小の自治体ながら多数の博物館や美術館が存し、観光客が訪れる北信の町である。長野市、須坂市、中野市、高山村に接し、四方を川と山に囲まれ、りんごやぶどう、栗の生産が盛んである。福島正則公の終焉の地でもあり、江戸時代には北信濃の経済・文化の中心地として栄え、葛

1976年には町内に残る北斎作品の研究や保全を目的として「北斎館」が設立された。常設の屋台展示室には北斎筆の「龍と鳳凰」「怒濤」の2枚の天井絵があり、人々を魅了している。また、山側の岩松院には北斎の描いた約21

を4回訪れ、多くの肉筆画を残している。江戸から240

ないと言われており、迫力ある鳳凰画は見る人を驚かせている。この岩松院にある小さな池では、小林一茶が集まった蛙を見て「やせ蛙負けるな一茶ここにあり」の句を残した。小布施町は南を流れる松川が氾濫を繰り返して扇状地として形成されたが、松川の水は酸性が強く、稲作には向きの水質であった。このような条件の中で栽培されてきたのが、現在も町の特産として生産されている「小布施栗」である。町中には「栗鹿の子」

で著名な栗菓子店が並び、栗の幹が石畳のように敷き詰め

の共働も進められている。19年からは長野市やフィナンシャルのトゥルク市と共働し、環境と経済が両立する新しいまちづくりを推進する動きが生まれつつある。

環境と経済の両立を推進

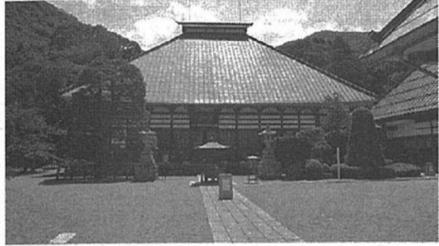
栗と北斎と花の町 長野県小布施町

栗の木の幹を利用した栗の小径

栗の木の幹を利用した栗の小径

栗の木の幹を利用した栗の小径

栗の木の幹を利用した栗の小径



北斎の天井絵がある岩松院



栗の木の幹を利用した栗の小径



栗菓子店が軒を連ねる商業地域

栗の木の幹を利用した栗の小径

栗の木の幹を利用した栗の小径